

Title	『ノストローモ』覚え書：沈黙の糸
Author(s)	西村, 由利子
Citation	Osaka Literary Review. 31 P.66-P.78
Issue Date	1992-12-20
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25450">https://doi.org/10.18910/25450</a>
DOI	10.18910/25450
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 『ノストローモ』覚え書

— 沈黙の糸 —

西村由利子

On the tenth day, after a night spent without even dozing off once . . . the solitude appeared like a great void, and the silence of the gulf like a tense, thin cord to which he hung suspended by both hands, without fear, without surprise, without any sort of emotion whatever. Only towards the evening, in the comparative relief of coolness, he began to wish that this cord would snap. He imagined it snapping with a report as of a pistol — a sharp, full crack.<sup>1)</sup>

コンラッドの長編『ノストローモ』(1904)の最終章近く、上に掲げた死を予感させるようなヴィジョンが描かれる。作品の主要な登場人物の一人である知的懷疑主義者デクーが、銀塊と共に一人イザベル島にとり残されて、全くの孤独と沈黙の中で日を過ごすうち、孤独が一つの大きな虚無のように口を開け、そして、湾の静けさが、己の両の手で掴まって中空にぶら下がっている、一本の張りつめた細い糸のように見えてくる。デクーは、夜に向かう安らぎの中で、その糸がプツツと、ピストルが炸裂するかのような鋭い音をたてて切れることを望み始めるのである。

『ノストローモ』の執筆が、コンラッドにかなりの苦渋を与えたことは広く知られている。600頁近いこの中期の大作は終始襲いかかる不安の中で書かれ、言うまでもなく、この後『密偵』へと続く、海を離れた陸の政治小説への転換点ともなった作である。この時期をしてコンラッドの一つの頂点とみなす批評家は多い。<sup>2)</sup> 作品は、多くの欠点が指摘されるものの、構想は壮大、構成は複雑で、手法も極まった感がある。革命が繰り返される一国の歴史展望を描きつつ、その歴史の流れの中に、実に多彩な登場人物を配して

いる。

このような、全体小説と言ってよい物語の包容力は、銀山という物質的利益をめぐる政治的・倫理的問題、象徴や神話・原型論的解釈、さらに、錯綜した時間構成について等、さまざまな観点からの論考を生み出してきたが、この小論では、冒頭に掲げた「沈黙の糸」、そしてその糸が切れる瞬間を待ち望む、デクーの死の情景の描写に着目し、それをめぐって、作品を覆う沈黙とその中で個人が経験する瞬間、そしてそれらが表す虚無の相など、小説の持つ一側面を考えてみたい。

## I

まず、作品の大枠を概観すると共に、そこにおいて描かれている沈黙がいかなるものか、イザベル島での情景を中心に考察してみる。

『ノストローモ』は南米の架空の共和国コスタグアナを舞台とし、そこで、先進国の資本家と結び付き、己の理想をもって国に秩序と安定をもたらそうとする銀山の経営者グールドと、進歩派リビエラ大統領とに対して、反乱、反動革命が勃発する。やがて革命騒ぎは納まり、その結果、その地方は、独立、繁栄を遂げるが、そういった歴史が描かれる一方で、その革命の渦中に巻き込まれ、銀塊をイザベル島に隠すという使命を帯びた2人の男、町の英雄ノストローモとデクーは、それぞれ、悲惨な死を遂げることになるのである。

上のような変動する物語の展開の背景として、常に不動の沈黙が配されている。舞台となる西部地方は、文字通り波一つたため<sup>静寂</sup>プラシド湾（“Golfo Placido”）と、沈黙を具現（“a colossal embodiment of silence” p.27）するかのようにどっしりと動かない山々に囲まれており、その中心となるスラコの町は、地理的に、世俗の外界から遮断され、それ自体が、沈黙の殿堂（“a natural temple of silence”）<sup>3)</sup> であるかのようになっているのである。このような情景、プラシド湾や山々や平原の織りなす沈黙、静寂は、作中随

所において繰り返し描かれ、時に、触れることのできそうなほど、それ自身が実体を持つ存在（“solid stillness”）として現れる。プラシド湾が体現する沈黙は、その中に銀塊と共にデクーが呑み込まれてしまったことを考えると、背景というだけではなくて、むしろ小説の中心を成しているとも言えよう。

またここで、作品を覆いつくすこういった沈黙に対して、人間が生み出すものとして描かれる以下の2つの「音」に留意してみたい。まず、国中に響きわたるのは、物質的利益の象徴とも言える、銀山の採鉱の音である。

The great clattering, shuffling noise, gathering speed and weight, would be caught up by the walls of the gorge, and sent upon the plain in a growl of thunder.... To Charles Gould's fancy it seemed that the sound must reach the uttermost limits of the province. Riding at night towards the mine, it would meet him at the edge of a little wood just beyond Rincon. There was no mistaking the growling mutter of the mountain pouring its stream of treasure under the stamps ; and it came to his heart with the peculiar force of a proclamation thundered forth over the land and the marvellousness of an accomplished fact fulfilling an audacious desire. (pp. 104-105)

高く切り立った山の斜面をガラガラと動く鉱石の滑り台が発する大きな音は、山あいでも反響し、その地方のすみずみに伝わる。静かな夜には、それが「山の嵐」のように聞こえてくると言うのである。銀山経営者グールドは、この音に、大胆不敵な願望が成就された実感を感じとっている。だが、この引用箇所の直後に、彼がかつて、「蛇の楽園」<sup>4)</sup> (“the very paradise of snakes”) と言い表わされる、密林に閉ざされた峡谷の孤独を凝視した時にこの音の響きを胸中に聞いたこと、そしてその頃の峡谷の自然の姿が、銀山のために見る影もなくなったことが描かれている。国中に重く響きわたる「山の唸り声」に、その音の孕む空ろな響きを感じざるを得ない。

さらにもう一つ、革命につながる「音」である。群衆、暴徒の発する声、

太鼓の音、馬蹄の響き、発砲の音。グールドが銀山と町を救うため、アメリカの資本家ホルロイドに手紙を書くことを決心した時、彼の声は、一斉に鳴り響く鐘の音に打ち消されてしまう。

His voice was covered by the booming of the great bell of the cathedral. Three single strokes, one after another, burst out explosively, dying away in deep and mellow vibrations. And then all the bells in the tower of every church, convent, or chapel in town, even those that had remained shut up for years, pealed out together with a crash. In this furious flood of metallic uproar there was a power of suggesting images of strife and violence which blanched Mrs. Gould's cheek. (pp. 381-382)

反乱軍に先導されて行進してきたモンテロの軍隊を歓迎するため、町の民衆がつけた鐘の音である。グールド夫人は、この「音」の中に危惧すべき暴力と闘争のイメージを感じとっている。

「声」が人間存在を保証するものであるように、これらの「音」は、人間の営みを示すものとして考えられることを強調したい。そしてその人為の「音」が帯びる響きは、そのまま人間の営みの虚しさと愚かさを呈しているのである。銀山と革命は、作品展開の中心的存在である。にもかかわらず、その「音」が、作品の中で対置される沈黙を圧することは決してない。

コンラッドの作品の中で、「沈黙」が最も好んで用いられた表現の一つであり、そしてそれが、むしろ満ち足りた平和な静穏を意味するものではなくて、多くの場合、取るに足らぬ人間存在を脅かす状況であるということは既に指摘されているところである。<sup>5)</sup> レトリックを駆使して何度も繰り返し沈黙を描こうとする試みが多くの作品の中でなされ、例えば、「闇の奥」においても沈黙に雄弁に語らせようとする。それが時に Leavis の有名な批判の対象の一つにもなっているのだが、<sup>6)</sup> F.R. Karl は、あるスペインの批評家の「コンラッドはメーテルリンクのように、沈黙を巧みに説明する」という言葉を指摘している。<sup>7)</sup>

既に示したように、『ノストローモ』においても、沈黙や静寂が小説の中で重要な位置を占めている。時としてそれは、登場人物達が表す、語ることの限界、言葉への懐疑、それでは埋めつくせぬ空白でもある。だがしかし、この作品の中で力をもって描かれているのは、プラシド湾に象徴される沈黙、すなわち、人間を想念の世界に追い込み、外界とのつながりから断ち切られた孤独の中で、己れの心の淵をのぞかせる状況であろう。そしてそれが、プラシド湾に浮ぶ無人の小島、イザベル島という設定を用いて見事に描き出されている。第3部第10章におけるデクーと、彼を包む沈黙について考察してみる。

デクーは、過去半年間に採掘された銀塊を隠すために、ノストローモと2人、船で真黒な闇の中をイザベル島に向かう。そして唯一人残された時、デクーを襲うのは絶対的な沈黙である。島での第一日目、「私は一日中、ただの一只の鳥さえも見なかった」(“I have not seen as much as one single bird all day”)と独り言を言う彼は、その自分の声以外、何の物音一つ聞くことがなかったのである：“And he had not heard a sound, either, all day but that one now of his own muttering voice. It had been a day of absolute silence — the first he had known in his life.” (p.496) 人間存在や営みを想起させる「声」も「音」もここではデクーの耳に届かない。全くの沈黙と孤独の中、彼が死に至るまでに描かれているのは、海へ漕ぎ出そうと歩を進めるデクーの後を閉じるかのような、茂みのかすかな空をきる音(“The bushes closed after him with a swish.” p.500)と湾上で漕ぐことをやめた彼が、オールを舟の中へ投げ込んだ時の音である：“The hollow clatter they made in falling was the loudest noise he had ever heard in his life. It was a revelation. It seemed to recall him from far away.” (p. 500) その空ろな響きは、デクーにとっては、まるで啓示のようにさえ思え、そして外界から遮断され、果てしない想念の世界に彷徨うている彼を遠くから呼び戻すかのように思えるのである。しかしながら、完全なる不信の世界へと駆りたてられている彼は、その音も、その音による外的世界とのつなが

りも信じることができない。

では、デクーを最終的に死に追いやった底深い沈黙がいかに描かれているかを考える前に興味深い一文を挙げておく：“Sir John arrived too late to hear the magnificent and inaudible strain sung by the sunset amongst the high peaks of the Sierra.” (p.40)<sup>8)</sup>「高いシエラ山脈の頂のはざま、夕日が奏でる壮大華麗な無言の調べ」という表現は、情景の澄んだ静けさを想わせると共に、巨大な山腹の色彩の変化を聴覚的に描写しようとしているのである。それが具体的な実感を伴って感覚に訴え得るかということは別として、本来視覚的イメージであるはずのものを、想像力によって聴覚的なそれに置き換えて捉えなければならない。

イザベル島の沈黙を描くにあたっては、これと全く逆の表現がなされている。沈黙の視覚化である。沈黙という実体のない状況を、よりはっきりと直接的に訴えかけてくる視覚イメージで描写している。眠れぬ夜には、沈黙が、デクーが両手でぶら下がっている綱という形をとって絶え間なく続き (“he dreaded the sleepless nights in which the silence, remaining unbroken in the shape of a cord to which he hung with both hands”)、昼間には、己れのはかない命がおもりのようにぶら下がっている、ほとんどちぎれんばかりに伸ばされた糸のように見える：“In the daytime he could look at the silence like a still cord stretched to breaking-point, with his life, his vain life, suspended to it like a weight.” (p.499)

では何故、沈黙を視覚化するにあたって糸のイメージを用いたのかについて、上に挙げた引用をもみながら考えてみると、一つには、人間存在のはかなさを表すためと言えるであろうか。ちぎれそうに張りつめられた細い糸にぶら下げられた人間。巨大な沈黙の威圧の下では、人間存在など取るに足らぬものにすぎない。「闇の奥」においても、「張りつめた綱の上で曲芸をする人間を静寂がじっと眺めている」という表現が用いられている。<sup>9)</sup> 糸は、人間存在や営みの卑小さを連想させるものである。

また、張りつめた、動かぬ (“still”) 糸は、沈黙の、脅やかすような緊張

状態を示唆している。細い髪一筋にかかっているダモクレスの頭上の剣<sup>(10)</sup>が、その危険と緊張を示すように、ぴんと張りつめた細い糸のイメージは、沈黙が、破られることを待つような、力を秘めた状態であることを感じさせるのである。デクーはその緊張の中、それが破られること、その力に呑み込まれること、つまり、沈黙の糸が切れる瞬間を待ち望むようになるのである。

## II

作中、革命という大仕掛けな歴史展開の中で、小さき存在である個人が、啓示的な意識や瞬間を得る。先にみた沈黙や静寂の中で経験するそれらをいくつか拾い上げ、重ねてデクーを中心として考えてみたい。

デクーはコスタグアナ生まれではあるが、パリ仕込みのディレクタント、知的優位を気取った懐疑主義者として登場する。常に傍観者の態度を保ち、政変に関心を持つべくもない。しかし美しいアントニアへの恋が、彼を革命の渦の中へ巻き込んでしまったのである。イザベル島で迎えを待つ間、彼は外界から全く隔絶された存在である。しかしその自分の存在すらも、全くの沈黙と孤独の中で、信じることができなくなってくる：“After three days of waiting for the sight of some human face, Decoud caught himself entertaining a doubt of his own individuality. It had merged into the world of cloud and water, of natural forces and forms of nature.” (p.497) 一目でも人間の顔を見たいと望みながら、外界からのつながりを絶たれたデクーは、自分の人格が、雲や水の自然の世界の中へ没し去ってしまったように思う。

このような意識に対し、ワーズワースの“spots of time”を引き合いに出して、コンラッドの「覚醒の瞬間」が顕わす「自己と自然の融和の危険性」と指摘する批評家がいるが、<sup>(11)</sup>むしろデクーは、沈黙と孤独に閉ざされて、今まで他者へと向けていた冷笑的な懐疑主義を、自己の内面へと向け、その結果、自然という客体と一線を画する確固たる主体、自己の存在そのものの



意識が薄らいってしまったのである。また、彼が絶対的な価値を置いていた知性と情熱も、ただ待つという行為の巨大な孤独の中に、やすやすと呑み込まれてしまうのである：“Both his intelligence and his passion were swallowed up easily in this great unbroken solitude of waiting without faith.” (p.498)

そして、デクーは、深く内省の世界に落ち込む中で、今までの人生に対し、間違っていたのではないかという漠然とした意識を抱く：“The vague consciousness of a misdirected life given up to impulses whose memory left a bitter taste in his mouth was the first moral sentiment of his manhood.” (p.498) ノストローモもまた、場所を変え、ほぼ同時期に、重ね合わすかのように、これと類似の経験を経ている。

ノストローモは、デクーを島へ残し、一人泳いで町へと戻ってくる。静寂と孤独の中で眠り続け目覚めた時に、彼は、自己の存在に対して激しい不安を感じる。果てしなく広がる静寂の海と、寡黙なる不動の姿を呈す壮大な山々に囲まれて、ノストローモは自分と、そして自分を取りまく世界を信じることができない。「だまされていたのだ」(“He had been betrayed!” p.418) という痛烈な意識に襲われる。そして「裏切られた」という言葉が彼の頭の中にこびりついて離れないのである。自分が自滅してしまったということに、突然はっと気づくのである。

The word had fixed itself tenaciously in his intelligence. His imagination had seized upon the clear and simple notion of betrayal to account for the dazed feeling of enlightenment as to being done for, of having inadvertently gone out of his existence on an issue in which his personality had not been taken into account. (pp.419-420)

しかしながら、このような、啓示的に得る自意識が2人をその後救うことはない。むしろ、2人が至る終局へと拍車をかける起因となってくるのである。

さらに、『ノストローモ』においては、上のような何かしらの覚醒を得る

というわけでもない、空虚な瞬間が描かれている。以下は、デクーがイザベル島へ赴くためにノストローモを待つ間、ヴィオラの経営する宿屋で妹に宛てて手紙を書いているところの描写である。

“I am waiting for him here now. . . . By the time this pocket-book reaches your hands much will have happened. But now it is a pause under the hovering wing of death in that silent house buried in the black night. . . . But no! feeling for you is certainly not dead, and the whole thing, the house, the dark night, the silent children in this dim room, my very presence here — all this is life, must be life, since it is so much like a dream.”

With the writing of the last line there came upon Decoud a moment of sudden and complete oblivion. He swayed over the table as if struck by a bullet. The next moment he sat up, confused, with the idea that he had heard his pencil roll on the floor. (pp. 248-249)

あたりには何の音も聞こえない。部屋も家も静まり返っている。まるで死の翼の下にいるかのごとくにである。そして、「これら全てが生なのだ、なぜならあまりにも夢に似ているから」という、彼の存在の不安を示唆するような一行を書き終えた時、突然デクーは、弾丸に射たれたかのような、完全な忘却に見舞われるのである。

この瞬間を考えるにあたって、もう一つ例を挙げてみる。銀山経営者グールドが若き日に妻エミリアに結婚を申し込む場面である。田園の静寂の中、鐘の音だけが細く鋭く響いている。

The only thing he wanted to know now, he said, was whether she did love him enough — whether she would have the courage to go with him so far away? He put these questions to her in a voice that trembled with anxiety — for he was a determined man.

She did. She would. And immediately the future hostess of all the Europeans in Sulaco had the physical experience of the earth falling away from under her. It vanished completely, even to the

very sound of the bell. When her feet touched the ground again, the bell was still ringing in the valley. (p.63)

彼の言葉を受けた時、エミリアは、自分の足元から大地が落下してゆくかのように感じ、そして全てが鐘の音に至るまで完全に消え去ってしまうのである。鐘の音を前後に配し、彼女の意識の喪失が見事に描かれている。Fredric Jameson は、これらの瞬間を、「時間の中の空隙」(“a hole in time”)、あるいは、「現実の中心の虚空」(“a void at the center of reality”)と表現している。<sup>12)</sup>

この2つの瞬間、すなわち、忘却の瞬間、意識喪失の瞬間をいかに捉えるべきであろうか。双方共、それによって啓示を得るわけでもなく、又、ロマン派のような永遠の相というものをそこに垣間見るわけでもない。むしろそのものが無くなるような、完全な「無の瞬間」である。あらゆるつながりから断ち切れ、まるで2人の存在が、一瞬、宙に浮遊してしまうかのようなのである。<sup>13)</sup>

また、エミリアが経験した、彼女を支える足場が崩れ、大地が落ちていくかのような瞬間は、後の彼女の、スラコでの存在の寄る辺の無さ(物質利益に傾倒する夫の理想主義への懐疑や孤独)を予感させるものであるが、同時にこれは、デクーが、その両の手で掴まっている沈黙の糸が切れた時、海へと落ちてゆく、その落下のイメージと重なってもいく。

デクーは、沈黙の糸が切れる時、その「音」を聞くだろうかと問うている：“I wonder whether I would hear it snap before I fell,” he asked himself.” (p.499) イザベル島へ赴く前のデクーが、鉛筆のころがる音によって、エミリアが鐘の音によって「無の瞬間」から「存在の世界」へひき戻されているかのような感を受けるのに対して、デクーは、その最後において、プラシド湾の孤独の中、沈黙の糸が切れる音を聞くこともなく、銀塊を抱き、海へと沈んでしまうのである。

The stiffness of the fingers relaxed, and the lover of Antonia

Avellanos rolled overboard without having heard the cord of silence snap in the solitude of the Placid Gulf, whose glittering surface remained untroubled by the fall of his body. (p.501)

このように、『ノストローモ』において、静寂や沈黙の中で、登場人物達は、啓示的に、痛烈な自意識、自己存在への懐疑を得るが、初期作品群を想起させる晩年作『日脚』においてのように、それによって彼らが成長を遂げていくというわけでもない。<sup>14)</sup> また、それらをより突き詰めた形として、「無の瞬間」は、彼らの存在の空虚な様を想わせる。これらの意識や瞬間は、『ノストローモ』の孕む、20世紀的な虚無の相<sup>15)</sup>を示唆していると言えよう。

### III

卑小なる人間存在を脅かす沈黙とそこにおける個人の覚醒の意識や瞬間をみてきた。デクーは、沈黙の中で、またそれをひきがねとして、底深い想念の世界へはまり込み、自己と対峙し極限にまで追いつめられ、そして沈黙を体現するプラシッド湾に呑み込まれてしまったのである。だがしかし、海へ落ちた彼の存在が、その水面に波一つたてることはない。

最後に、もう一つ、人間存在や人間の至る究極的な瞬間を呑み込むものがあることを指摘しておきたい。それは、時の流れである。『ノストローモ』が錯綜した時間構成を持つことは既に触れた。小説の時間の流れは断片化され、それらが、シャッフルされたかのようにばらばらに配置されている。例えば、デクーやノストローモの死の情景が描かれる前に、革命の後、繁栄を遂げ平和になった町で、ミッチェル所長が、のんきに観光客相手に革命騒ぎを講釈している姿が描かれる。このことによって、よく指摘されるようなアイロニーの効果が生じている<sup>16)</sup>と言えよう。しかし、全てが「歴史的イベント」(“historical events” p.473)の一つにすぎなくなっている、とそこで語られていることを考える時、一個人の体験する底深い認識や虚無の瞬間、一生の一断面が、遠大なる歴史展望の中、音なき時の流れに呑み込まれてしまった

ことを感じるのである。デクーが、存在の糸が断ち切られるかのような、あのような瞬間を迎えたとしても、時はえんえんと続いていく。

不動なる自然、そしてその沈黙を、過ぎゆく時の証人とみなすこともできよう。『ノストローモ』は、その双方に呑み込まれていく人間存在を示唆するという一面を持つのである。

## 注

- 1) Joseph Conrad, *Nostromo*, ed. Keith Carabine (Oxford UP, 1984), pp. 498-499. 以下、本文からの引用は、Dent's Collected Edition に基づいたこの The World's Classics 版に拠り、頁数のみを引用末尾に記す。なお訳文は、鈴木建三他訳（筑摩世界文学大系50、1975）を参考にさせていただいた。
- 2) 例えば、Jacques Berthoud, *Joseph Conrad : The Major Phase* (Cambridge UP, 1978), p.94.
- 3) Aaron Fogel, "Silver and Silence : Dependent Currencies in *Nostromo*," *Modern Critical Interpretations : Joseph Conrad's Nostromo*, ed. Harold Bloom (New York : Chelsea House Publishers, 1987), p.115.
- 4) Claire Rosenfield, *Paradise of Snakes : An Archetypal Analysis of Conrad's Political Novels* (Chicago and London : University of Chicago Press, 1967), pp.43-78. 参照。スラコをエデンの園、グールド夫妻をアダムとイヴに見立てている。
- 5) 吉野由利「コンラッドの小説にみる「沈黙」— 『勝利』を中心に』『オペロン』1976年16巻2号 pp.33-41. 参照。
- 6) Leavis は、'inscrutable,' 'unspeakable' などの、コンラッドの形容詞多用のレトリックを批判している。F.R. Leavis, *The Great Tradition* (London : Chatto & Windus, 1948 ; rpt. Penguin Books, 1989), p.204.
- 7) F.R. Karl, *A Reader's Guide to Joseph Conrad* (London : Thames & Hudson, 1960), p.155.
- 8) 既に Jameson がこの箇所を引用し、興味深い論考を繰り広げている。Fredric Jameson, *The Political Unconscious* (Ithaca : Cornell UP, 1981), p.239.
- 9) Joseph Conrad, *Heart of Darkness* (New York : W.W. Norton, 1971), p.34. 参照。
- 10) 同時期に書かれた『海の鏡』の中に、このダモクレスの頭上の剣への言及があり、「颯風」にも同様の表現が用いられている。
- 11) Jay B. Losey, " 'Moments of Awakening' in Conrad's Fiction," *Conradiana*, XX, 2 (1988), p.97.

- 12) Jameson, *op., cit.*, p.240. Jameson はここにあげた 2つの瞬間と「沈黙の糸」とを絡めて考察し、論を展開している。
- 13) この作品において、「浮遊している」(“suspended”) というイメージを多く見出すことができる。例えば、イザベル島の描写 (p.411) 参照。
- 14) 拙稿「*The Shadow-Line* における瞬間」*Osaka Literary Review*, XXX (1991) で考察した。
- 15) Leavis, *op., cit.*, p.230. 参照。Leavis は、作品の中にある虚ろな響きを指摘している。
- 16) 例えば、Cedric Watts, *Joseph Conrad : Nostromo* (Harmondsworth : Penguin, 1990), p.81. 参照。